
オルフェノク-灰流の肖像-

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オルフェノク - 灰流の肖像 -

【Nコード】

N4645N

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

ある日、一人の少年が『人間』でなくなった…その少年は想う、『何故^{うづま}転生れ、何故「生きている」のだろう…?』と…本来迎えるべきであるはずの運命に逆らい、死の旅を経て人から『異形』と化してしまい、再びこの世に新たな命と力を宿した『灰流者^{はいとくしゃ}』達の産声^{うぶごゑ}が今日もまた響く…

(前書き)

本作は仮面ライダー555に登場する怪人『オルフェノク』が主な
主役、ならびに登場人物となる小説です
オリジナルキャラ

尚、主役であるファイズは勿論、カイザやデルタは一切出ません
… 閲覧の際にはご注意ください、ならびにご了承下さい(汗)

- 陽が落ちた街中、人間とは明らかに違う、二人の『灰色の異形』がいた。

『ハアハア…』

- 一人は逃亡者…

『待てエツ!!』

- 一人は追跡者…

- 逃亡者である灰色の存在は思つ…。

- 何故、自分は『転生^{うま}れ』…。

『嫌だ!!』

- 何故、自分は『生きてる』のだろう?…と。

『「死にたくない」!!どんな形だろうと…折角生き返れたのに!
!もう一度「死ぬ」なんて嫌だアツ!!』

- 必死で悲痛な叫びが街中にと、こだました…。

- 『彼』が『灰色の存在』となる前…。

「ありがとうございますー。」

- 店員の挨拶をバツクに中学生くらいの三人の少年が模型店から出て来た。

「いや〜収穫収穫ウ」

- 顔を常に（ ）な感じに緩め、頭からアンテナの様に立たせてるアホ毛が一本生えた黒い短い髪の毛の背が低めの少年・霞愁かすみ・シユウが大量のガ プラを抱えながら嬉しそうにハシヤイでいた。

「フツ…俺も欲しいの買えたからな、ミッションコンプ任務完了だ。」

- 大量に買った愁とは対照的に一つだけ買ったエアガンを眺めながら、後ろ髪をツンツン跳ねさせた金髪に丸いサングラスの少年・紫桐刃うらやいばは静かな笑みを浮かべる。

「OH！シユウにヤイバ！早く早く！今度はボクの買い物に付き合っ
つて下さいー！」

・別な目的があるのか？唯一何も買わなかった様子である、若い少年にしては珍しい薄く少し長めの白髪に縁の厚い眼鏡に碧眼の外国人の少年・ロワイヤ・テラーが二人を急かす。

「解ってるって、ロワイヤ」…キミのお目当てはゲームでしょ？PCの新作『R18（エロゲ）』」

「Yes!」

・鼻血を垂らしながら実にいい笑顔でサムズアップして愁に応えるロワイヤ。

「オレ達、まだ中学生だぞ？^{みせいねん}買えるのか？」

・ジト目でロワイヤを見つめる刃…そりやそうだ、明らかに18禁モノのPCゲームを未成年真つ盛りな中学生が買えるわけがない、『普通』なら…。

「No Problemだね、ヤイバ、何せボク、ちよつくと、『コネ』があるから 融通利かせてキミ達にも買わせてあげる様に頼むから付き合ってくださいよ」

「フツ…このエロ外人め…。」

「さあ行くこうか！エロの楽園へ〜!!」

・ロワイヤの絶対な自信のこもった言葉に刃と愁は鼻血を垂らしながらサムズアップし、馬鹿三人はエロの園…ではなく、新たな目的の中古ゲームシヨップ（新作ゲームも扱っている）へと向かった。

・ロワイヤが個人的に仲が良いバイト店員が融通利かせてくれたため、18禁エロゲーを買えて大満足な三人はその後昼食に牛丼食べたり、本屋で立ち読みしたりしながら休日を遊んで過ごした。

・そして三人が帰る途中にコンビニに寄った際…。

「おい、金出せや。」

「や・だ・ね」

・…状況を説明するところである。

・たまたまコンビニ前に居座ってた彼らの通う中学の不良に絡まれた、しかも中学生とは思えぬくらい大柄なヤクザ面で、しかも空手の有段者であることで有名で、尚且つすぐキレて相手が女子供でも普通に殴るかなりヤバい奴だった、だが愁は代表して当然却下宣言した。

「じゃあ死ねやツ!!」

・不良は当然ブチ切れた…だが所詮いくら強かろうがそれは『一対一での』話。

「食らえ…!!」

「ギヤアアアアアッ!?!」

・刃は隠し持ってた改造エアガンで『禁忌』とされる『眼を撃つ』行為を平然と行い。

「Fuck！死ぬのはそつちだッ！！」

「痛ったあああああ！！」

・ロワイヤはポケットから取り出した警棒で頭を滅多打ちに。

「空手ならオレも習ったよ？小学生の時に一年くらいで挫折したけどねー！」

「ウギヤアアア！！た、助け…！！」

・トドメに愁が自身の発した空手経験発言とは『全く無関係』に、普通にマウントポジション取って顔面を目茶苦茶殴りまくった…最後の仕上げに…。

「…不良はゴミ箱だろがッ！！！！」

「アゴガゴガッ！？」

・三人は不良を持ち上げて頭の方からゴミ箱へと放り込んだ上にトドメに飛び蹴りをかました…当然、こんな騒ぎをコンビニ店員や通行人が通報しない訳がない…。

「ちょ…やばッ！？警察だよッ！？国家権力だよッ！！」

「フッ…やり過ぎたか…。」

「HaHaHa!どー見ても100%ボクら悪人だねツ!それじゃここで解散だツ!生き残れたらまた会おう!!」

「オーツ!!」

- パトカーのサイレンが近づいて来たため、ロワイヤが発した提案に愁と刃は頷いて即・賛成、この場で解散し、三人はそれぞれバラバラな方向へと逃げ去った…。

「あははは〜 あー疲れた〜…あーしんどツ!!刃とロワイヤは無事かな〜?まあ、あの二人なら大丈夫だよね?」

- 愁はパトカーや警察官の気配が完全に無くなったことを知ると、その場に座り込み、二人の無事を願いつつ一休みする。

「いやいや、友達と馬鹿やってると本当に楽しいや、青春時代の思い出のアルバムを飾るにはいい刺激だと思うんだよね。」

- 汗を拭きながら愁は顔を再び()な風にしてしみじみと友人のありがたみを感じながら、明日学校で会ったら今度は何しようか?みたいなことを考えてた…その時だった。

「ウフフ…こんにちは、ボウヤ…。」

「んにゃ？なんでしょか？おねーさん。」

- 全く気配を感じさせずにいきなり髪で片目が隠れしまっている妖靡な雰囲気を纏った女性が一人現れた、内心少し怖い意味でドキツとしたが、愁は怖じけずにとぼけた口調で返事を返す。

「ナンパのつもりならオレのタイプじゃないから遠慮しときまーす。」

「

「ウフフ…まだ何も言っていないけどつれないのね、お姉さんそんなにボウヤのタイプじゃないの？」

- どこかズレた会話になったが愁はふと立ち上がり、女性にこう告げた。

「うん…なんか知らないけど、おねーさんなんかケバ…じゃなかった、『ヤバい雰囲気』出しまくりだから、ね！！」

「ちよ…今『ケバい』って言おうとしただろ！？あ、待てッ！！」

- 愁は理由はよく解らないが自身の本能が『逃げる』と叫んでるのを感じ、脱兎の如く逃げ出した、そのためさりげなくヒドイことを言われた上に愁が逃げたのを見て女性も追いかけようとした時、『異変』が起きた。

『ハアアアアアアア…！！』

「んげッ！？何アレ！！！」

- 愁が後ろを振り向いて驚いたのも無理は無い…何故ならそこにい

たのもうあの女性とは『別の存在』だったからだ。

- 正確に言えば、先程まで女性『だったモノ』が、黒い奇怪な紋様を顔に浮かばせて、眼が灰色に染まった瞬間…『違う姿』に変わっていたのだ…。

- 全身は何故か灰色…そして女性らしくスリムなフォルムをとり、顔には仮面舞踏会のマスクの様なものを被り、首周りや両手首や両足首から長い触手が垂れ下がるように生え、身体にはボンテージみたいなものを纏い、ヒールの様な形状になった足を持つ、まるで怪しいエロチックな世界の女王を彷彿とさせる姿をしていた。

「ざ、残念だけど…オレは至ってノーマルだから！SM趣味はノミの毛程も無いからッ！」

『好きでこんな姿してる訳じゃないわよッ！本当はすごく恥ずかしいのよ！？』

- 何やら変な言い争いをしながら二人は逃亡・追跡をする…。

- 灰色の怪物女の正体…『オルフェノク』。

- 一度死んだ人間が何らかの原因と限りなく低い確率で再びこの世に生き返った灰色の身体と動植物の能力を持つ『異形の存在』…。

『もう我慢ならない…殺してやるわッ！！』

「うわッ！凶星指されてキレた！？」

- 灰色の怪物女・SMの女王様改め、イソギンチャクの特質を持つ

シーアネモネオルフェノクはいきり立って愁に襲い掛かる。

『死ねエツ!!!』

「うわわッ!?!」

・シーアネモネオルフェノクはいきなり首を歌舞伎役者の如く荒々しく振り回し、触手を伸ばして攻撃…まるで無数の槍の如く降り注ぐ攻撃を愁は危なかつしくも回避しまくる。

『待て!』

「お断り!仮に、死にたいのがお望みで本当に待つ奴が居たとしたらソイツは究極のマゾだろうねッ!?!」

・攻撃・回避・攻撃・回避…こんなやり取りを繰り返しながら逃げ回ってる内に愁とシーアネモネは人通りに出てしまう…。

「キヤアアアア!?!」

「わ!?!」

・と、偶然出くわした少女が愁の背後に迫るシーアネモネを見て驚いたため、愁はビツクリする。

『クッ…見られた!?!ならばお前も死ねえッ!?!』

「嫌…やめ…!?!」

「よ、よせッ!?!」

・シーアネモネが伸ばした両腕の触手の槍が少女に迫った時、愁は思わず彼女の前に立ち…。

「グア…！？早く…逃、げ…」

「嫌…嫌アアアア！」

『フン…まあいいわ、始末する手間が省けたから…。』

・愁は心臓を一突きにされ、それにも関わらず少女に逃げる様に促し、その場にバタリと倒れてしまう…少女は申し訳なさそうな、悲しそうな表情を浮かばせつつ悲鳴を上げて逃げた。

「ガ、ハ…。」

『あっちのお嬢ちゃんは逃がしたけど、まあいいとするわ…。』

・シーアネモネはやがて愁が死んだことを確認・一瞥し、そのまま立ち去る…。

（オレ…このまま死んじゃうのかな…？）

・愁はふと、死ぬ間に刃とロワイヤ、二人の親友を思い出す…。

・クールな立ち振る舞いをするも、一緒に馬鹿やって楽しんできた刃。

・明るく陽気で、少しスケベだが仲間のためなら人一倍頼りになるロワイヤ。

・その二人に別れを告げられないまま死ぬ自分が申し訳なく、そして無力さを痛感し、悲しくなる…。

(ゴメン…二人共…オレ、一足…早く、人生…おしまい、みた…い…。)

・やがて愁は息を引き取る…だが。

「…あれ？生きてる？」

・一瞬、愁の眼が灰色に染まった後、確かに心臓を貫かれて『死んだはず』の愁は立ち上がり、顔に黒い奇怪な紋様が浮かび…そして…。

『…ん？うわッ！？なんじゃこりゃあああ！！』

・愁はその辺のガラスに映った自分の『変わり果てた姿』に盛大に驚いた。

・全身が灰色なのはシーアネモネと同じだが姿形は全く『別物』。

・後頭部に背ビレを生やした海獣を思わせる険しい顔つき、口元を

覆うマスク、両腕にもヒレが生え、身を包む様にロングコートに似たものを羽織り、脚にはブーツとった、スタイリッシュな姿をした、霞愁改め、シャチの特質を持つオルカオルフェノクと化したのだ。

『オレ、バケモンになつとるウウウウウ！！』

『なんですって！？』

『…って！！戻るの早ッ！？』

・オルカオルフェノクが叫んだと同時に、いつの間にかシーアネモネが戻って来た。

『このくたばり損ない…私は純粹に殺すつもりでいたのに！！生き返りやがって！！』

『そんな身勝手な！！』

・シーアネモネはただ単純に愁を殺すつもりだった…しかし、触手で突き刺す行為が本人の意図しない内に発動した、オルフェノクが殺した人間を極めて低い確率でオルフェノクにしてしまう『使徒再生』能力が災いし、愁もオルフェノクになったのだから、一度殺した相手が生き返ったんでは殺す楽しみもクソも無い。

・そして話は再び『冒頭』に戻る…。

『逃げるなッ！！』

『嫌だッ！！！！』

・再び命懸けの鬼ごっこ・第二ラウンドを開始したシーアネモネとオルカは忙しなく街中を駆け巡る…。

(クソ！何か…何かあのヒステリッククイーンに反撃する手は無いのかよツ！？)

・オルカは思考を巡らせて反撃の手立てを考える…相手と同じ様な異形になったのだから『何かある』はず…。

『武器！武器は無いのか…おツ！？』

・オルカが『武器』が欲しいと念じた途端、いつの間にか手にはイカリを象った剣が握られていた。

『うりゃあああああ！！』

『…クツ！？』

・一か八かイカリを象った剣・アンカーブレードを振るってシーアネモネを攻撃…^{オルカ}獲物が急に反撃してきたため、シーアネモネは咄嗟にガードした。

『よし！塞がれたけど効いてるツ！？』

『ガキがアアアアア！！舐めんじやないわよオーツ！！』

・しかし、逆上したシーアネモネが首回り・両腕・両脚、全ての触手を鞭の様に振るってオルカに手痛いカウンターを食らわせた。

『ウツギヤアアアアアアアアア！？マゾに目覚めたらどーすんだよ

「！！ギヤオオオオオ！？痛っだあああああ！！」

『うるさい！！そのまま死ぬエエエエ！！』

- 意外と大丈夫そう（？）だが、再び死ぬ危険性とマゾに目覚めそうな危険性…二つの意味で危険な状況に置かれたオルカはこのままシリアネモネの鞭打ち（スパンキング）を受けて死ぬのか？と…意識が薄れかけた時。

『ウルアアアアア！！』

『W O O O O O O O W ! ! !』

『ギヤアアアアア！？』

『！？？』

- 突然、二人組のオルフェノクがいきなり乱入して来た。

『フツ…弱い者イジメとは感心せん…。』

- 一人はどこかクールな性格であり、頭にはツバが広く中心にドクロマークを付けたテンガロンハットを被り、両腕には鋭い鎌を思わせる鋭利なエッジを生やし、滑車付きブーツを履いたイタチの特質を持つウィーズルオルフェノク。

『アナタ達は何者…！？何故邪魔を…』

『Hold your tongue…！（ツベコベ言っな…！）』

・もう一人は何故か英語混じりで喋っている、頭に羽根飾りを立てた鳥のような顔に、西洋の騎士甲冑に身を包んだ中世の貴族を彷彿とさせる高貴な姿、右手にサーベル、左手に翼の紋章が描かれたハンドシールドを持った、ツバメの特質を携えたスワローオルフェノクが現れたのだ。

『んにゃ？アンタ達、誰？』

『何：オレ達はただの…。』

『心ある Monster さ！』

・尋ねるオルカにそう言うと、ウィーブルオルフェノクとスワローオルフェノクは一斉に飛び掛かり、シーアネモネに攻撃を仕掛けた。

『フツ！！』

『Slash！！』

『ギャウ！？ガハアアアアア！！』

・ウィーブルの鎌状のアームエッジとスワローのサーベルによる斬撃がシーアネモネに確実なダメージを与えていく。

『このクソ共がアアアア！！』

『フン…。』

『SLOW！SLOW！そんな攻撃当たらないね！！』

・触手を伸ばして反撃に移るシーアネモネだが、戦い慣れてるのか？二人は余裕で攻撃をヒラリとかわす。

『スゲー！！』

『フツ…君にも何か出来るはず、さあ…その力を見せてくれ。』

『そう…君のMY Skillをね！』

(ぬづ…そう言われても…)

・二人に言われ、オルカは心の中で(;)な表情を浮かばせながら、また念じた…すると…。

『オレの下半身がエライことにイイイイイイ！』

・…先に断っておくが、今の発言は決して下品な意味では断じてない…突如、オルカの下半身が『シャチそのもの』に…簡単に言えばシャチの上に人の上半身をくっつけた様な奇妙な姿に変化して宙に浮かんでいた。

・オルフェノクは時折、本来の姿とは別に、様々なタイプの強力な第二・第三の『形態』を持つ個体がいることがある…。

・オルカの場合は魚などの水棲系の生物型のオルフェノクが持つことが
多い形態『遊泳態』のようだ。

『ちょ…あんなのアリ…!?!』

『フツ…有りだな…。』

『No Problem むしろ Good!』

『有りなのツ!?!』

・あまりのとんでもない展開にシリアネモネが驚愕するも、ウィー
ズルとスワローは『有り』との裁定を下した。

『もうヤケだー!!食らえ!!!』

『フツ…オレ達も行くぞ…。』

『OK! Welcome to the hell!!(地獄へようこそッ!!)』

・オルカは空中を舞いながら下半身のシャチの口から巨大な氷塊を
大砲の弾の如く発射、ウィーズルは両腕のアームエッジから真空波^{ソニックブーム}
を巻き起こし、スワローは背中から翼を生やして無数の羽根の矢を
放つ。

『うが!ぎひ!?ヒギヤアアアアア!』

・やがてシリアネモネは全身から青白い炎を噴き出しながら爆発し、
死体は一切残らずに文字通り、単なる『灰』になってしまふ…。

『フー…助かったよ〜どこの誰かは知らないけど…え?』

『フツ…言っただろ?オレ達は弱い者イジメがな…へ?』

『Yes!彼の言う通り?』

- 三人はその場で一斉に人間の姿に戻った瞬間…。

「「「アー—————ッ!?!?」」」

- オルカ 愁を見た刃とウイースルロワイヤ（スワロー）、そして刃とロワイヤを見た愁は盛大な声を上げた…。

「なるほど〜オルフェノクねえ〜まさか君らもオルフェノクになっちゃってたなんて…。」

- あの後、愁はオルフェノクについてのレクチャーを刃とロワイヤの二人から受けて自分が何なのかを改めて理解し（信じた理由は自分自身が今こうして生き返ったから）、今度は愁が二人に質問した。

「オレはあのケバい女王様風のオルフェノクに殺されたのが原因（?）みたいけど…君達はなんで?」

- 愁はさぞやシリアスな理由があるに違いない、と…『一度死んだ

身』である彼らに失礼ながらも期待をしつつ、聞いてみた。

「…裏山で手製の時限爆弾作ってたら暴発してしまい、その時死んだ…不覚！」

「…エロゲやってる最中にいきなり雷がパソコンに…Oh My God！」

「君達バカだろ。」

二人してなんたるふざけた理由か…スケベ根性丸見えなロワイヤはともかく、特に刃の理由が一番危なく意味不明である、何を目的に爆弾を作ったのやら…愁はオルフェノクになった刃よりもそつちの作業をする刃の方が遥かに危険だと思った…。

「…しかし、二人がオレよりも先にオルフェノクになるなんてね…今まで気づかなかったよ。」

「フツ…それはオレも同じことだ、変身を解くまで本当に霞君とは思わなかったな。」

「It's Miracle!なんという偶然…それに普通だったら三人の内、誰が本当に死んでもおかしくないよ?」

形はともあれ、本来訪れるはずの『死の運命』に逆らつての後ろめたい蘇生だが、互いの生存にホッと胸を撫で下ろす三人…。

「でもオレもなれてよかったよ、オルフェノク…だってさ、もう二

人に会えなくなったらと思うと…死ぬ際にはそればかり考えてたよ…。」

「…霞君…。」

「シユウ！」

「うおッ！？なんだなんだッ！！」

・愁の二人を想う気持ちが伝わったのか、二人はいきなり彼の肩を抱く様な姿勢を取ったため、愁はかなり驚いた。

「その…そう思われると改めて嬉しいのだが…」

「死して尚ボク達のことを…Oh! My Best Friend
！」

「アハ、アハハッ これから先もずっとオレ達は真の友人と書いて『真友』だねッ！！」

・その後も三人は例え死の理ことわりから外れた自分達であれども、友人に再び会えた喜びを分かち合い、これからも色々な苦難をきつと三人の力を合わせて乗り越えていくだろう…。

- 死の運命に逆らい、その罰をこの身に受けたが如く、その身は異形、されど心は人のまま…心までは決してこの先、異形とならぬ様に誓い合った三人のオルフェノク達の運命の形…灰流はいとくの肖像の物語はこれからも廻り、巡っていく…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4645n/>

オルフェノク-灰流の肖像-

2010年10月9日11時01分発行